

## ベネデット・クローチェの文芸批評と同時代のイタリアの詩人たち

本論文は、20世紀のイタリアを代表する哲学者ベネデット・クローチェ（1866-1952）の美学思想を、彼の文芸批評家としての活動に注目しながら読み解こうとするものである。以下のような3部構成で議論を進めつつ、彼の思想体系の中で、美学理論と文芸批評とが互いにどのような影響を与えつつ発展していったのか、という点を明らかにしていく。

### 第1部（第1章～第3章）

第1章では、クローチェの美学思想の受容史・研究史を紹介する。戦後イタリア本国では、20世紀前半に圧倒的な影響力をもったクローチェ思想に対して、批判的な態度を取る学者が大勢を占めるようになる。そんな中、1960年代になると Contini、Puppoらが、クローチェの美学理論と文芸批評に関して客観性の高い論考を発表し始める。その後、1980年代からは、varianti（異本）に注目した新たな視座からの研究が行われるようになる。1980年代後半には Giammattei が文体論的な観点から varianti（異本）の研究を導入し、大きな成果を収めた。2000年代に入ると Audisio がクローチェの主著『美学』に関して文献学上の問題を明るみに出す優れた研究を発表し、クローチェ研究の世界に新たな地平を切り拓いた。一方我が国においては、クローチェ美学に関する総合的な研究も、文芸批評に特化した研究も、いまだ存在していない。

第2章においては、クローチェの主要な美学書と見なされる作品の内容を通覧する。具体的には、クローチェの最初の理論的著作とされる論文「芸術の全般的な概念のもとに帰される歴史」（1897）から、晩年の集大成的美学書『詩について』（1936）にいたるまでの7本の作品について、それぞれの梗概を紹介する。そしてその上で、クローチェの美学思想の変遷を大枠で捉えた図式を提示する。第3章では、クローチェの文芸批評家としての活動を、時系列に沿って紹介する。具体的には、彼の全キャリアを6つの時期に区分した上で、そのそれぞれの時期に、どのような作家を取り上げ、どのような手法で論じたか、という点を明らかにする。第2章、第3章をもって、クローチェの美学思想に関する基本的な情報を提供したことになるが、それは、本稿第2部および第3部においてより踏み込んだ個別の議論をするにあたっての前提知識ともなる。

### 第2部（第1章～第3章）

クローチェの文芸批評の中でも、特別な注目に値するのは、同時代文学に関するものである。というのは、同時代文学に対するクローチェの態度を年代順に辿って行くとある種の変節がそこに見出され、またその「変節」が彼の美学理論の発展と深い関わりをもつものだと思われるからである。だが、一口に「変節」と言っても、以下の各章で見ていくように、その内実は非常に複雑なものである。

第1章では、クローチェが評論誌「*La Critica*」の誌上で行った同時代文学に関する連載「19世紀後半のイタリア文学についての覚書」(1903-14)に関して、特にカルドゥッチ考に焦点を合わせた検証を行う。この連載内で、クローチェは詩人カルドゥッチを2度(1903年および1910年に)俎上に載せているのだが、実を言うとそれは彼の文芸批評の一般的傾向から逸脱する行為である。なぜ、クローチェは7年という短い期間に、しかも同一の連載の中で、2度に渡ってカルドゥッチを論じたのだろうか。論者は、この間に対する解を導き出すべく1903年から1910年までのクローチェの作品に検討を加え、次のことを明らかにした。すなわちクローチェは、1903年、カルドゥッチに始まるイタリア文学の歴史的図式を描くことを目的として連載を開始したものの、1909年そのプランを変更して再びこの詩人について論じるにいたった。また、そのような経緯で1910年に発表された第2のカルドゥッチ考は、1907年から1909年にかけて生じたクローチェの美学の理論的発展を代表する作品でもあった。そして、この新たな理論が形成されていく過程でクローチェの念頭にあり続けたのはほかならぬ詩人カルドゥッチだったのであり、だからこそ、プラン変更をしてまでクローチェは新たなカルドゥッチ考を執筆しなければならなかった、のである。なお、新たな理論のモデルが他の詩人ではなくカルドゥッチでなければならなかった理由については、第3章で検討することとする。

第2章においては、作家ダンヌンツィオに関してクローチェが著した2本の評論(1904、1935)を分析する。クローチェ美学について、その基礎を示す『美学』が1902年に出版され、またその集大成たる『詩について』が1936年に上梓されたという事実を考慮に入れると、クローチェ美学の変遷とダンヌンツィオに関する2本の評論との間になんらかの相関関係が想定される。ダンヌンツィオに対するクローチェの評価は、この2本の評論の間でなんらかの変化を来したのだろうか。そしてそうだとすれば、それはクローチェ美学の発展とどのような関係にあるのだろうか。こうした問題に関して、まずPupino(2004)等を参照しつつクローチェの諸テクストを分析することにより、1904年のダンヌンツィオ考では手放しの賞賛といくつかの留保を混在させたダンヌンツィオ評価が表されており、また1935年のダンヌンツィオ論においては全面否定に近い評価が下されている、ということが明らかになった。しかし、1904年の時点でクローチェがダンヌンツィオを賞賛したことについて、その説得的な理由はいずれの先行研究においても提示されていなかった。論者は、先行研究において問題とされてこなかった

様々なテクストを検証することにより、《1904年の直前にダンヌンツィオが多くの優れた作品を発表しており、ある種の復活を遂げたようにクローチェの目に映っていた》、ということをも明らかにし、以って賞賛の理由を提示することに成功した。

第3章では、第1章、第2章の結果を踏まえつつ、同時代文学全般に対するクローチェの評価の変遷を分析した。クローチェは、1903年のカルドゥッチ考では《カルドゥッチを先頭に置くイタリア文学の新時代》を高く評価していたのだが、1907年に発表された「最近の伊文学」論文においてはダンヌンツィオ、パスコリ、フォガツァーロの3者に代表される《最近のイタリア文学》の「病的」な傾向に対して苛烈な批判を加えるようになる。たった4年の間に、なぜこのような劇的な変化が生じたのだろうか。論者は、1903年から1907年にかけて執筆されたクローチェの文芸批評を、それらが再録された評論集『新生イタリアの文学』との相違に注目しながら分析し、次のようなことを明らに出した。すなわち、まずクローチェは、『美学』を発表した頃（1902年）、後期ロマン主義という頹廢の時代が過ぎ去り、カルドゥッチに始まるイタリア文学の「新時代」が到来していると感じていた。だが、ダンヌンツィオに代表される次世代の文学者たちは、クローチェが期待していたものとは違う方向にその後進むことになる。また、クローチェ本人は、自らに不思議な印象を与えるパスコリ文学について本格的な研究に取り組み、その悪しき性質「断片性」を発見した（1907年）。さらに、「断片性」が同時代文学全体の傾向であること、また「第3の世代」にいたってその傾向がより甚だしくなっていることが明らかになると、クローチェにはイタリア文学の復活が失敗に終わったと感じられるようになる。そして、クローチェがかつて抱いた希望が失望に変わっていったとき、「新時代のイタリア文学の旗手」とみなされていたカルドゥッチは「時代を乗り越えた稀有な詩人」に変貌せざるをえなかったのである。

### 第3部

第3部では、第2部の結果を踏まえつつ、クローチェ研究の世界において最も多く論争の対象となってきた問題の一つ、すなわち彼の美学思想における「倫理」の位置づけについて検討した。20世紀初頭に一世を風靡したクローチェの美学は、もともと、《芸術の自律》という原則に則り「芸術」と「倫理」の明白な区別を強調する理論として知られていた。ところが、晩年のクローチェの著作の中には、「芸術」を「倫理」と接近させているかのように見える言説がしばしば現れる。クローチェの美学理論は、ある時点を境に「倫理」を排除するものから「倫理」を包含するものに変化してしまったのだろうか。そして、同時代のイタリア文学——芸術と倫理の関係について、従来の規範から逸脱したような態度を示した——は、クローチェの美学の変遷にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

論者は、第2部において示した時代背景を踏まえつつ、個々のテクストを本人の意図に忠実に理解しようと努め、クローチェが「倫理」に関して単純な意味での意見変更を

したわけではなかったことを明らかにした。そもそもクローチェは、当初から、芸術と倫理の単純な接近を否定しつつも、同時に、芸術家は芸術家として誠実であるべきだと考えていた。他方、モラリズム（作家が実人生においても倫理的に優れているべきだとか、またモラルに反する題材を選んではいけないなどと主張するような議論）は、晩年のクローチェにあっても変わらずに批判され続ける。確かにクローチェは、1907年頃から、「頽廢主義」と呼ばれる文学潮流について非常に辛辣な見解を示すようになる。しかしそこで批判の対象となったのは、単なる官能的な描写や、非道徳的な題材選びなどでは決してなく、感情と表現（もしくは内容と形式）の不一致、もしくはその表れとしての「断片性」であった。晩年のクローチェが芸術家に求めた「倫理性」とは、表現の段階においては、「断片性」に反する力、作品のイメージを統合する力、だったのである。